

大隈庭園



① 《エミレの鐘・韓鐘閣》



寄贈者：韓国校友会

寄贈年：1983年

素材：銅

場所：大隈庭園

韓国の慶州国立博物館が所蔵する、国宝 32 号として指定されている新羅の聖徳大王神鐘（通称：エミレの鐘）の 2 分の 1 の複製品である。鐘の上部の「龍頭（りゅうず）」と呼ばれる龍型の部分によって鐘身が支えられている。日本の鐘である「和鐘」との違いは、和鐘は鐘身が紐（ちゅう）という隆起した線で縦横、狭広の区画に分割されている（紐によって作られる縦横の区画を「袈裟襷（けさだすき）」という）が、韓国鐘にはその袈裟襷が無い。そして胴部に飛天などの図像が表されているのが特徴である。鐘が収められている韓国伝統様式の韓鐘閣には、韓国の伝統的な彩色がなされている。韓国で伝統的に用いられている五つの色（「五方色」＝黄青赤白黒）の、間の色（五方雜色）が多く使用されており、特に多くこの鐘楼に使われている緑（青と黄）は、『平和と成長』という意味が込められている。

②《孔子像》



寄贈者：中華人民共和国政府

寄贈年：2008 年

素材：銅

場所：大隈庭園

中国春秋時代の思想家・教育者であり、儒家の祖でもある孔子の銅像。楊潔篪外相が胡錦涛国家主席の早稲田大学訪問の際、中国政府を代表しての孔子像寄贈の意を表明したことで像が設置され、2008 年 6 月 16 日に銅像の除幕式が執り行われた。中国政府が日本に孔子像を贈るのは早稲田大学が初めてであった。崔天凱大使は祝辞にて「孔子思想は我々

の共通の財産である。どのように時代が変わっても、人と人の関係や国と国の関係などについて多くの有益な啓発を行っている孔子思想は、社会と世界の調和した発展にとって重要な意味を持っている」と述べ、孔子像が両国の友好関係の更なる発展の象徴となることを願っている。実際に早稲田大学と中国との関係は明治時代から続いており、2016年5月現在、本校の中国人留学生は在留学生数の半分を占める2550名が在籍している。また、胸の前で両手を合わせる独特なポーズは「拱手」といい、中国で敬礼を表すものである。拱手において男性は左手を上に、女性は右手を上に重ねるのが通例だが、凶事の挨拶の際には左右を逆にするのが礼儀とされている。

③《十三重の層塔(左上)、五重の層塔(右上)、灯籠各種(雪見灯籠(右下)、立灯籠(中央下)、活込灯籠(左下)など》



場所：大隈庭園

大隈庭園は井伊掃部頭・松平讚岐守の下屋敷にあった和様四条家風の名園であり、当時の石造の構造物が残っている。

石造層塔は木造層塔と同様に、仏教の供養塔を由来とし、奇数の層数は陰陽の陽を表している。この陰陽思想の影響から、日本においては奇数は縁起の良い数字とされる。

一つ一つの石造層塔や灯籠に注目すると規則的な文様などが装飾として用いられていることが分かる。また石の硬さを感じさせない、柔らかな曲線美が目をひく。灯籠の特徴である傘や窓の形状もそれぞれ異なっており、網目のような装飾が施されているものや文様が付されているものまで様々である。これらの灯籠は石造層塔と共に日本の造園の伝統を感じさせるような味わい深い作品である。

層塔は雄々しく巨大で、雪見灯籠や立ち見灯籠は丸みを帯びた可愛らしい造形である。庭園の中には様々な石造があるが、それらは草木の陰になっているものも多い。隠れた石造を見つける楽しさがあるのではないだろうか。

④《稻友石（校友会 125 周年記念）》



制作者：古谷誠章(設計)、校友会

制作年：2010 年

寸法：125×125cm

場所：大隈庭園

2010 年、早稲田大学校友会設立 125 周年を記念して大隈庭園内に建立された。校友会は

会員同士の交流や会員と大学との関係を発展させることを目的に、1885年に設立された組織である。早稲田大学の在校生や卒業生が自動的に会員となり、2017年4月現在約62万人の会員を擁している。

「125」という数字は大隈重信の提唱した「人生125歳説」にちなんだものである。これは座談集『縦談横語』の中で大隈が語ったもので、「規則正しく生活すれば人は125歳まで生きられる」という説である。このことから早稲田大学には「125」に関係したものが多く、例えば大隈講堂の時計塔は高さ125尺である。

稻友石は一辺が125cmの丸みを帯びた立方体であり、側面には第15代総長白井克彦の筆による「ともに世界へ ともに未来へ」の文字が刻まれている。デザインは、建築家で早稲田大学理工学術院教授の古谷誠章が担当した。

⑤《田中穗積銅像》



制作者：朝倉文夫

制作年：1957年

サイズ：約2.5m

素材：ブロンズ

場所：大隈庭園

田中穗積(1876-1944年)は早稲田大学第4代総長(1931-1944年)を務めた人物である。また財政学者、法学博士であり貴族院議員に勅選された経歴を持つ。東京専門学校(現早稲田大学)政治科を卒業し、『東京日日新聞』記者を経てコロンビア大学へ留学した。帰国後は早稲田大学講師、そして理事を務め、総長に就任してからは大学の規模拡大に手腕を振るつ

た。

この銅像は彫刻家朝倉文夫によって制作され、早稲田大学創立 75 周年を記念して校友会により設置された。ガウンを着用し腰かける田中は、角帽を手に持ち右膝の上に置いている。背筋を伸ばし両足を大きく開いた田中は沈着な様子で威厳を保っている。顔は斜め前を向き、一文字に閉じた口には意志の固さが感じられる。

*朝倉文夫について

朝倉文夫は日本の近代彫刻における中心的な存在であり、「東洋のロダン」とも呼ばれる彫刻家である。1883 年に大分県に生まれ、19 歳の時に同じく彫刻家であった兄、渡辺長男を頼り上京。その後東京美術学校で彫刻を学ぶ。1908 年の第 2 回文部省美術展覧会において《闇》を出品し世に知られるようになると、1910 年には代表作《墓守》を発表、この作品において自然主義的様式を確立する。晩年に文化勲章を受章している。

朝倉は肖像彫刻を制作する際には、相手の形だけでなく内面をもじっくりと観察しなくてはならないと考えていた。その為、3 度銅像制作に携わった大隈重信との交際も多岐にわたった。朝倉は北畠治房から大隈を紹介されると早稲田の大隈邸を度々訪問し、綾子夫人とも親睦を深めた。朝倉制作の 3 体の大隈像は、デザインが全て異なる。1916 年制作の像は公家の正装である衣冠束帶であるが、1932 年制作の像は早稲田キャンパスの中央に設置することもあってか、学問を象徴するガウンに角帽姿である。そして 1938 年制作の国会議事堂に設置された四代目の銅像は洋装のフロックコートを纏っている。朝倉は、大隈の政治家としての性格だけでなく教育者としての性格も詳細に捉え、それを銅像制作に活かしたと言えるのではないだろうか。

参考文献

早稲田大学ホームページ「大隈記念講堂・大講堂について」

⟨<https://www.waseda.jp/culture/facility/auditorium/>⟩、2018 年 1 月 20 日最終閲覧

早稲田大学ホームページ「早稲田大学が海外から寄贈されたものについて」

⟨<https://www.waseda.jp/top/news/48000>⟩、2018 年 1 月 20 日最終閲覧

Waseda Vision 150 「キャンパスがミュージアム vol.1」

⟨<https://www.waseda.jp/culture/assets/uploads/2015/04/campus-museum-1.pdf>⟩、2018

年 1 月 20 日最終閲覧

Waseda Vision 150 「キャンパスがミュージアム vol.2」

⟨<https://www.waseda.jp/culture/assets/uploads/2015/04/campus-museum-2.pdf>⟩、2018

年 1 月 20 日最終閲覧

早稲田大学校友会ホームページ「校友会設立 125 周年記念碑について」

⟨<http://www.wasedaalumni.jp/125/monument.html>⟩、2018 年 1 月 20 日最終閲覧

監修：奥島孝康/中村尚美、著：鎌倉喜久恵「人生百二十五年説」『エピソード 大隈重信』
1989年、早稲田大学出版部
近代日本人の肖像 - 国立国会図書館「田中穗積について」
〈<http://www.ndl.go.jp/portrait/datas/360.html?cat=92>〉、2018年1月20日最終閲覧
朝倉彫塑館『朝倉彫塑館の記録』
朝倉文夫『カメラの把えた朝倉文夫の彫塑』1955年、朝倉彫塑塾
朝倉文夫『大隈重信候の性格及び家庭に就いて』（書写年不明）
朝倉文夫『衣・食・住；朝倉文夫隨筆集』1942年、日本電建出版
朝倉文夫『制作雑話』19—年、日本美術学院
日本経済新聞社編『私の履歴書 第9集』1959年、日本経済新聞社
四つの大隈銅像と政治家大隈重信
〈http://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/48334/1/WasedaDaigakushiKyo_47_Hiwa.pdf〉、2018年1月20日最終閲覧
朝倉彫塑館ホームページ「朝倉彫塑館について」
〈<http://www.taitocity.net/zaidan/asakura/>〉、2018年1月20日最終閲覧